

「那津官家と糟屋屯倉」

講師・回答：坂上 康俊先生(九州大学名誉教授、放送大学客員教授)

この度は大宰府アカデミー・令和編 第2期を受講いただき誠にありがとうございます。

皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。

なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q／ 屯倉は、朝廷の直轄する食料供給源と考えてもよいのでしょうか？また、磐井の乱後に、息子の葛子が屯倉を献上したということですが、この屯倉を実際に支配していたのは誰でしょうか？

A／ 回答

屯倉についてはやかましい議論が続いていますが、取りあえず通説と考えるところをお答えします。屯倉は前期屯倉と後期屯倉に分けられます。前期屯倉は政治的な拠点のヤマトを中心とする、後に畿内と呼ばれるところに、5世紀頃には設定されていたと見られるもので、これは律令制下の屯田・官田にもつながっていく「朝廷の直轄する食料供給源」と考えて構いません。これに対して、6世紀以降に地方に設定された後期屯倉、すなわち糟屋屯倉や安閑朝に諸国に置かれた屯倉は、現実には所在地の豪族が管理するしかなかったはずで、ただし、中央から使者が出向いたり、あるいは中央から管理者が派遣されて世襲的に経営することはありました。現地の豪族(国造など)が管理するのであれば、それは「朝廷の直轄」とは言えないでしょう。また地方の屯倉の場合、収穫するのは米ですが、それをヤマトまで運ばせる場合もあれば、屯倉でとれた米をその地の特産物と交換して、特産物の方をヤマトに運ばせることもあったと考えられます。その場合は「食料供給源」とは言えなくなります。那津官家に運ばせた屯倉の穀も、朝廷への「食料供給」とは言えません。

葛子が献上した屯倉、すなわち糟屋屯倉を当初支配していたのが誰かは分かっておりませんが、大きく分ければ二つの考え方がありえます。一つは、献上はしたけれど筑紫はヤマトからは遠いので、実際には筑紫君の一族や支配下のものが支配し続けたというもの、もう一つは、献上させた以上、勝利者側の物部氏・大伴氏の支配下の者や同盟者が管理するようになったというもの。決め手はありませんが、後者の可能性の方が大きいと思われます。那津官家と関係が深そうな東光寺剣塚、及び糟屋屯倉に関係が深そうな鶴見塚古墳の調査成果が待たれるところです。

Q／ 「官家」「屯倉」「御宅」などは、いずれも「ミヤケ」と読まれていたとのことでした。現代的な感覚なのかもしれませんが、「宮家(=天皇家)」を連想してしまいます。6世紀中頃には天皇家という意味はなかったのでしょうか？

A／ 回答

「ミヤケ」は「ミ」+「ヤケ」なので、天皇家という意味はありません。むしろ「オホヤケ」の方が、ずっと後には「天皇」を指すことがあります。